

1 目的

この報告の目的は、嫌韓とナショナリズムとの関係を明らかにすることにある。嫌韓感情が表出される嫌韓デモは近年増加しており、2013年「不逞朝鮮人追放！韓流撲滅デモ in 新大久保 2013/2/9」などの新大久保や鶴橋で頻繁に行われるデモで、過激なシュプレヒコールがヘイトスピーチとして問題になっている。今や嫌韓デモの参加者は、「レイシスト」と呼ばれ、イデオロギーを問わず多方面から批判されており、特に2月9日以降は嫌韓デモに対するカウンターが盛んになされている。しかし、一方でヘイトスピーチを含む嫌韓デモの参加者がインターネットを中心として、「愛国者」「日本人の代弁者」として一部支持されているのも事実である。このような状況の中で今嫌韓を表明する人は、「レイシズム」「差別主義」と呼ばれる自分たちの活動を正当化し、愛国運動として理解しているのか考察する。

2 方法

そこで、データとして「在日特権を許さない市民の会」（在特会）滋賀支部への聞き取り調査から得た情報から考察した。調査対象は、滋賀支部の街宣活動の参加者である。街宣活動の参加者は、滋賀支部のメンバーだけでなく、大阪支部や他の保守系団体からも参加している。滋賀支部の街宣活動は、多くて5人で、その内の2人が滋賀支部のメンバーである。多い時は数百人という規模で行われるデモに比べると、在特会の街宣活動は細々と続けられており、動画共有サイトに投稿されている動画の再生数も少ない。しかし、街宣活動は、個人が自由に主張することができるので、個々の参加メンバーの関心や思いを理解するのに適している。

3 結果

分析の結果、在特会滋賀支部への聞き取り調査から分かったことは、今年に入って滋賀支部の運営メンバーが自分たちの活動を「レイシズム」「差別主義」と言われることに対して気にしており、差別的な発言をなるべく排除するようにしていることであった。以前はどんなに過激な表現を使っても内集団の中で共有されている「敵」を攻撃していれば「愛国者」という称号を得て活動できていたが、外部からの批判を受けることにより嫌韓を表明する表現方法や彼／彼女らの「愛国者」としてのあり方が変化していることがわかった。しかし、一方で表現を当たり障りのない言葉にすると、旧世代の保守運動を「きれいごと保守」として批判し、過激さを売りにしてきた在特会の支持者が去ってしまう可能性があり、そのジレンマがあるようである。

4 結論

以上から、以前まで嫌韓の表明がそのまま「愛国者」につながる回路が存在していたが、外部から批判されることにより嫌韓の表現方法や「愛国者」について再帰的に考えるようになった。

文献

樋口直人、2012、「排外主義運動のマイクロ動員過程——なぜ在特会は動員に成功したのか——」アジア太平洋レビュー